

# 先人の知恵から

## 46

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回は「ト行、ナ行」から以下の12個。  
引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- 団栗の背競べどんぐり せいくら
- 泣いて暮らすも一生、  
笑って暮らすも一生。
- 長いものには巻かれろ
- 鳴かぬ蛩が身を焦がす
- 泣き面に蜂
- 泣く子と地頭じとうには勝たれぬ
- 無くて七癖ななくせ
- 鳴くまで待とう時鳥ほととぎす
- 成す者は常に成り、行う者は常に至る
- 七転び八起き
- 七つ七里に憎まれるななきと
- 生兵法なまびようほうは大怪我のもと

### 〈団栗の背競べ〉

どれもこれも平凡で、抜きん出たものがないことのたとえ。どんぐりは形も大きさもほとんど同じで差がなく、背競べしても優劣は決め難いことから。「背競べ」は「背比べ」とも書く。

この諺は子どもにも、保護者にも使うことがある。反対の意味に使うことが多い。つまり、同じところで戦っていても、大した差はでないから、違うところで勝負してみたらと言う話をするときを使うのである。

小学校のかけっこでは、タイム別にすることが多く、大差がつかないようにしている。それは、足が遅い子が恥ずかしい思いをしないようにと言う配慮である。こんな風に、大体同じくらいの子で比べ合っているのが本当に配慮なのかどうかはわからない。しかし、同程度のところばかりで競い合っ

ていると、もっと上、もっと凄い人との比較ができづらく、自分が世の中でどの位置にいるのかわからないだろう。そういう意味で、団栗の背比べをしているよりも、自分をもっと伸びしろを持っているもので頑張ってみたほうが良いのではと伝えるのである。

運動が苦手でも絵がとても上手な子、歌がとてもうまい子、算数が凄くできる子等々、それぞれの得意分野と言うものがある。それを伸ばしていく方がずっと良いという意味でこの諺を引き合いに出して伝えている。

#### <泣いて暮らすも一生、

#### 笑って暮らすも一生>

泣いて暮らそうと笑って暮らそうと、人の一生に変わりはない。同じ一生なら苦勞の多い人生であってもくよくよせず前向きに生きて、楽しく暮らす方が良いということ。「笑って暮らすも一生、泣いて暮らすも一生」ともいう。

坂本龍馬の名言「泣いても一生、笑っても一生、ならば今生泣くまいぞ」も同意。

#### ドイツで古くから伝わることわざ

不安が強い子や、ネガティブ思考の子は、常にマイナスなことばかりを考えて、苦しんでいる。笑いヨガというのがあるが、「ワッハッハー」とそれこそ大げさに笑ってみるのだが、特に何か面白いとか楽しいとかではなくても笑っているうちに本当に笑えてくるのだ。そんな話をしながら、この諺をだして「笑っていれば何となく楽しくなってきた、マイナスなことがどうでもよく

なったりすることはよくあるし、ずっと泣いたり苦しんだりして暮らしているのどっちがいい？」ときいてみる。辛いほうを選ぶ子はほとんどいない。

「笑う門には福来る」と一緒に伝えることも多い。笑っているとなぜか不思議と良いことが連鎖してくるものだ。昔、何から流行ったのかは忘れたが「笑ってごまかせ自分の失敗、あくまでけなせ他人の失敗」などと言っていた。他人の失敗をけなさなくても良いし、自分の失敗をごまかさなくてもよいけど、笑い飛ばすことは健康的だと思う。大笑いはストレス発散にもなる。世の中全体が鬱々としてくると、お笑いが流行る。生活がそんなに簡単に変わるわけではないのだから、せめて笑っていたい。笑いは幸せを呼ぶと思う。笑顔の素敵な人は、好感を持たれるということも付け加えている。

#### 英語では・・・

Better live a merry life than a sad one.(楽しい暮らしの方が悲しいものより良い)

#### ドイツ語では・・・

Die Lebensspanne ist dieselbe, ob man sie lachend oder weinend verbringt.

#### <長い物には巻かれろ>

権力のある者や目上の人には逆らわないで、大人しく相手の言うなりに従っている方が無難であり、得策だということ。

権力におもん阿るという話ではなく、もし自分が改革や改善などの意見を持っていて、そ

れをはっきりと提示できるなら、どんどんいうべきではあるが、何も意見もなく、考えもないのに、ただただ反発だけしているような子どもには、こんな諺を伝えることがある。先生の言うことにいちいち反発していないで、言われた通りに動いてみたらかえって楽だったりする。もちろん、何でもかんでも従いなさいということではないとも伝える。「時には『長い物には巻かれろ』と言う諺を思い出して巻かれてみよう」と。

#### 英語では・・・

It is no meddling with our betters. (目上の人たちと争うことはできない。)

#### <鳴かぬ蛍が身を焦がす>

口に出して言わない者のほうが、かえって心の中での思いは切実であるというたとえ。鳴くことのできない蛍が、激しい思いのために身を焦がさんばかりに光っているという意から。「鳴く蝉よりも鳴かぬ蛍が身を焦がす」ともいう。

子どもたちの中には、自分を出せないで苦しんでいる子、一生懸命自分の怒りを抑え込んでいる子などがいる。特に怒りを抑えるのはエネルギーを使い、それだけで日々疲れてしまう。自分の気持ちや言い分を出さないと、自分だけで抱え込んでしまうのは本当に苦しい。大人になれば必然的に何でも言えなくなるのだから、せめて子どもの内は、もっと自分を出してほしい。そういう思いでこの諺を子どもたちに、そして、余り物を言わない子を持つ親に伝えている。

#### <泣き面に蜂>

不幸や不運の上にさらに不幸なことが重なって起こることのたとえ。泣いてむくんでいる顔をさらに蜂が刺すということから。「泣きっ面に蜂」「泣きっ面を蜂が刺す」ともいう。

出典 「江戸いろはがるた」

余談：ちなみに、京都いろはがるたの「な」は「済こすときの閻魔顔」。大阪・名古屋では「習なわぬ経は読めぬ」

この諺はかるたになっていることもあり、多くの方に知られていると思うが、様々な会話の中で使っている。「弱り目に祟り目」とか「二度あることは三度ある」なども同義だが、悪いことが重なることは間々あるので、そんな時に使っている。

それでも、悪いことばかりがずっと続く話ではないというのも一緒に伝えている。そうしないと悪い話だけで終わってしまうから。

#### 英語では・・・

An unhappy man's cart is easy to tumble. (不幸者の馬車は転倒しやすい)

#### <泣く子と地頭には勝たれぬ>

権力のある者にはどうやっても勝てないから、無理を言われても従うほかないというたとえ。泣いて駄々をこねる子どもと、権力を持っている横暴な地頭には、こちらが道理を言っても聞き分けてもらえないとい

うことから。「泣く子と地頭には勝てぬ」ともいう。地頭＝中世に荘園を管理していた役人で、農民に対して強大な権力を持っていた。

今時地頭の話をしてわからない人がいるだろう。この諺は当然母親に使っている。泣いて駄々を捏ねている子どもというのは、母親にとってとても困る。スーパーなどでもよく見かけるが、そういう時の母親の対応は様々。「これほしー」と駄々を捏ね、泣き始めたら、「わかったわかった、買って帰ろうね」とする母親もいれば、「勝手に泣いてれば」と冷たく去っていく母親もいて、そんな場合は子どもの方が慌てて泣きながら追いかけていく。母親支援の講話などの時に母親たちにこういう時どうするかと聞くと、「値段をみて、安かったら買うけど、高かったら安いものに変えて買ってあげる。」と言う人もいれば、「とりあえず車まで連れて行って説得する」「その場で説得する」「いい加減にしなさいと叱る」などさまざまである。何が正解かではない。その時その時で対応が変われば子どもは混乱するかもしれないし、いつも何か買ってもらえれば、買ってもらえるものと思ひ込むだろう。言葉の理解が十分でなかったら、説得も難しい。最初に何か安いお菓子を持たせてそれで買い物物をさっさと回って帰るといった手もある。

大抵の母親が通る道でもあり、困りごとの一番に挙げられる。どの時代でも、泣く子には中々勝てずに苦労するのだとわかれば、一時のことなのだとして少し緩やかに思え、母親たちの気持ちがちよっぴり楽になると思い込んでいる。

英語では・・・

We must fall down before a fox in season. (猟期には人は狐の前にひれ伏さなければならない)

### <無くて七癖>

人は誰でも癖をもっているもので、癖がなさそうに見える人でも七つくらいは癖があるということ。「無くて七癖、有って四十八癖」「難なくて七癖」ともいう。「七」は「無く」の「な」に音を合わせたもの。

完璧な人間などいないのに、完璧を目指している子や親がいる。完璧を目指したら、それは凄く苦しい話になるだろう。しかし学校では100点満点だけが認められる傾向にある。その様な中にいれば、子どもたちが完璧を目指すのもわからないでもない。

そういう子どもたちや親に聞く。「あなたの親は完璧ですか?」と。大抵の返事は「完璧とは言えない」となる。たまに「完璧」という答えがあったら、「本当にそうかな?どんな人が見ても完璧でなくちゃ完璧とは言えないけど」と言うとしばらく考えて、「やっぱり完璧ではないかも」となる。

世の中に完璧な人はいない。人は間違えるし、失敗もする。忘れ物や失くしものをする事だってある。それが人らしさでもある。完璧を求めるならロボットにすればよい。勿論ロボットでさえ精度の問題はある。

人間は色々欠点があって人間なのだとかわかってもらうためにも、この諺を使う。癖というのは、性格の一部でもあり、悪い癖というのも誰でもいくつ持っている。寝起きが悪いとか、ついついスマホをみてしまう

とか、あれもこれも目くじら立てて叱っていては息が詰まるし、気にしすぎの人間を作ってしまうかねない。

もっと緩やかに、子育てをし、母親である自分も、もっと緩やかに認められたら良いと思う。

英語では・・・

Every man has his faults. (人にはだれでも欠点がある)

＜鳴くまで待とう時鳥＞

無理をせずに、好機が到来するまで忍耐強く待つことの大切さを言ったことば。時鳥が鳴かないなら、鳴くまで気長に待っていようという意から。

この諺と言うか歌は歴史でも学ぶ有名なものである。織田信長と豊臣秀吉、そして徳川家康それぞれの性格を表すと言われている「鳴かぬなら」で始まる歌があり、その一つである。それぞれの気の長さ、短さを表している。三人の中で一番気が長いのが家康で、この句も家康を表す歌の下の句である。

歴史、特に武将が好きな子もいて、そういう子には、こうした話がすっと入る。「短気は損気」と言うように、気長に待つことができることの利点をつたえる。また母親たちには、子育てにおける「待つ」姿勢を伝える時にこの言葉を使っている。

ちなみに、「鳴かぬなら、殺してしまえ時鳥」が織田信長、「鳴かぬなら、鳴かせてみせよう時鳥」が豊臣秀吉の性格を表した句で詠み人は、松浦静山（注）。

＜成す者は常に成り、行う者は常に至る＞

なまけないでやり続ければ必ず成し遂げられるし、目的をもって進み続ければ必ずそこに到達できる。春秋時代の齊の政治家晏嬰<sup>あんえい</sup>が努力の大切なことを述べたことば。

出典 晏子春秋

「為せば成る」は類語。江戸時代後期の米沢藩主上杉鷹山が家臣に示した歌「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の成さぬなりけり」から。

おそらく、「為せば成る」の方が有名かもしれないが、類語なのでこちらを紹介した。

最近、子どもたちは面倒くさがり屋が多く、地道にコツコツと言うことが苦手な子が増えた。何事も素早く進んでしまう現代では、地道にコツコツなどやっつけられないと思うのも仕方のないことかもしれない。それでも、途中であきらめずに、地道にコツコツ続けることは大切であると伝えていきたい。そんな意味でこの故事をつたえる。

目的を持つことも大事で、目的なしにコツコツ続けることは難しいだろう。目的が自分が求めている物かどうか、実現可能かどうかはとても大事である。動機づけができなければ、コツコツは続かない。

しっかり目的を確認し、そこに向かって道を決め、くじけそうになったときには、目的の再確認をしながら再度進む。道は何本かあっても、目的がしっかり決まっていれば、最終的にはたどり着くだろう。

＜七転び八起き＞

何回失敗してもあきらめずに頑張ること

のたとえ。また、人の世の浮き沈みが多く厳しいことのたとえ。七回転んでも八回おきるということから、「七転八起」<sup>しちてんはつき</sup>「七度転びて八度起きよ」<sup>みなたひ</sup>ともいう。「失敗は成功の基」は類義。

この諺は「失敗は成功の基」と一緒に使うことも多い。一回失敗しただけであきらめてしまう子が増えている中で、転んでも転んでも、何度失敗しても頑張る子を見つるととてもうれしくなるし、応援したくなる。

赤ちゃんが独歩に進むときを想像してもらうこともある。赤ちゃんは何度失敗しても、立ち、一步を踏み出そうとする。その度に座ったり立ったりを繰り返し、漸く一步目を出すことができる。そして、一步が二歩に、二歩が三歩にと増えていく。その間も何度も失敗し、あつという間に何歩も歩けるようになる。転んで泣いてしまうことだってあるが、それでも歩こうとする。諦めたら歩けるようにはならない。

そんな赤ちゃんの様子を伝えたり、エジソンがフィラメントを作ったときの話や、たくさんの失敗ののちに成功した人の話なども入れながら、くじけそうになった子どもたちを励ましている。

### <七つ七里に憎まれる>

七歳ぐらいの男の子はいたずら盛りで、近隣の村の人々から憎まれるようになるということ。七里=多くの村里。

小1から小2ぐらいの子どもたちはやんちゃで、元気も良く、いたずらも多い。特に

小2は学校に慣れてきたこともあって、ちょっとした「悪」の時代だと思う。今の小学校の様子からみると、3, 4年になっても変わらない感じもする。この諺の七つは、おそらく数え年で、今の6歳くらいかと思うが、今の7歳は昔に比べたら幼く、8, 9歳でもこれに当たるかなと思う子も見受けられる。

一方小学校に上がる前は、母親たちの心配は、学校になじめるか、友達ができるか、勉強についていけるかの三つ。いたずらや悪さについてはさほど心配していない。と言うのもやんちゃな子が少ないからでもある。元気いっぱいの子どもたちを見ると、こちら元気を貰えるのだが、とぼとぼ元気がなく通学路を歩いている子を見ると寂しい気持ちになる。

大人の世界と子どもの世界の境界があいまいになって久しい。子どもたちが、わんぱくでたくましい姿を見せてくれるようにとの思いも込めてこの諺を挙げた。

### <生兵法は大怪我のもと>

少しばかり兵法を知っていると、それに頼ってしまって大怪我をすることになる。中途半端な知識や技術は、かえって大きな間違いを起こす原因になるといういましめ。「生兵法は大疵<sup>きず</sup>のもと」ともいう。生兵法=ちょっと聞きかじった兵学や武術。

SNS やインターネットから情報を得るようになってかなりの年月が経った。子どもたちも大人も、インターネット情報を得ている。そうした情報にはいろいろ混じっているが、正しい情報かどうかの精査をす

るシステムはまだ不十分である。それでも子どもも大人も、ネットで得た情報をそのまま、他者に伝え、流布したりする。間違っただ知識は、百害あって一利なし。見分を広めることは大事だが、その情報の精査は怠ってはならない。そういう意味でこの諺を伝えている。

英語では・・・

A little learning is a dangerous thing.(少しばかりの学問はきけんである)

#### 出典説明

晏子春秋・・・八編（内編六編、外編二編）

春秋時代の齊の宰相晏嬰さいしやうあんえいについての説話をまとめたもの。著者・成立年代共に不明であるが、戦国時代から漢代にかけて成立したとされる。晏嬰が使えたれいこう 魯公・莊公・景公の三君をいさめ、治世に努力した言行が記されている。

（注：）

松浦静山・・・平戸藩第九代藩主。松浦政信の長男として江戸で生まれた。側室の子だった静山は、父が早世し、12歳で祖父の養子となり、16歳で家督を継いだ。幼いころから記憶力に優れ学問が出来たが、病弱だったため、文武両道を目指し、心形刀流（しんぎょうとうりゅう）免許皆伝の腕前を持つほどになった。君主として維新館という藩校を設立、身分にとられない人材登用も行い、藩政改革を成功させた。「甲子夜話」全278巻の作者。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編より転載させていただいている。